

第2回 いなべ市立小学校適正規模検討委員会 会議概要

- 1 日 時 平成24年7月17日(火)
開会 午後2時
閉会 午後5時
- 2 場 所 員弁教育会館 研修室
- 3 出席委員 丸山康人 東川薫 日沖貴 小林芳樹 日紫喜隆嘉 近藤吉江 児玉美奈子
近藤利彦 黒淵泰博 小林共子 藤井豊 三羽守夫 川村光次
- 4 出席した事務局職員の職氏名
教育長 片山富男 教育部長 近藤重年
教育総務課長 小林幸次 学校教育課長 小川専哉
学校教育課課長補佐 伊藤彰浩 教育総務課主任 辻貴久子
- 5 会議次第
 - 1 開会
 - 2 会長あいさつ
 - 3 前回議事録の確認
 - 4 議事
日程第1 第1回検討委員会を受けて
・いなべ市の人口動態と児童生徒数の推移
・北勢町における分校統廃合の事例から
・小規模・複式学級のメリット、デメリット
日程第2 いなべ市の学校教育の現状について
・各学校の特色ある取組み
・学校教育現場における課題や問題点
 - 5 その他
 - 6 閉会
- 6 会議の要旨

日程第1 第1回検討委員会を受けて

◎いなべ市の人口動態と児童生徒数の推移

(事務局)

- ・いなべ市の人口動態と児童生徒数の推移及び児童生徒数の10年推計について、資料を教育総務課長が説明した。

(委員)

- ・東川委員から、事前に人口推計の説明を受け「この10年推計の数値は、市の総合計画とは違う算定方法であるのでズレが生じるかもしれないが、この10年推計が、妥当性を欠く調査ではないと判断する。」との報告があった。

◎北勢町における分校統廃合の事例から

(事務局)

- ・北勢町における分校統廃合の事例について、資料を教育総務課長が説明した。

(委員)

- ・本校の児童と分校の児童とは、受け入れる側と入っていく側であるが、児童はどのような気持ちだ

ったのだろう。

(委員)

- ・本校と分校の児童は、運動会や学習発表会などは本校と合同で活動していたため違和感はなかったし、分校の子は本校の子に比べて足が速く、勉強もできる方だったので、自尊感情が大きかった。
- ・運動会や卒業式の練習などのため分校からタクシーで移動していた。時間的にも経済的にもロスがあった。
- ・子どもたちの関係は、分校の子同士、本校の子同士で固まる傾向があった。
- ・分校では、算数などは少人数での授業のため理解させやすかったが、図工は少人数だと上手な子と似たような作品ばかりになってしまう傾向にあった。
- ・少人数で授業をするとほぼマンツーマンの状態で早く理解させられるので、授業を切り上げて校外へ活動に出かける時間がつくれた。
- ・分校では、地域の方が学校活動に熱心に協力してくださった。

(会長)

- ・十社小学校の分校統合は平成9年に懇談会を行ってから平成15年の統合まで6年の月日がかかっているが、地元の反対によって6年もかかったのか。

(事務局)

- ・地域に提案して地域の状況を教えてもらっていた。協議をゆっくりやっていたのではない。その後、町合併の動きもあり町の課題は町で解決しておくことが重要であるということで意思統一された。そのため、平成14年4月に幼稚園を統合し、平成15年4月に分校の統合と進んだ。分校の跡地は、現在は地域広場になっている。児童は朝分校跡地に集合してスクールバスで通学している。

(会長)

- ・現在の市財政は交付税が旧町ごとに算出し合計額で交付されているが、平成30年には1市の単位で算出した交付額になり厳しい財政状況になる。また、合併特例債は、合併後10年が15年に延長されたが仮に小学校の統合をして校舎を建築しようとする場合には、25年以降の5年までに着工していないと合併特例債が利用できない。そうすると、財政的制約も踏まえて統合の時期について考えたタイムスケジュールを示し、共通認識として持つておく必要がある。

◎小規模・複式学級のメリット、デメリット

(事務局)

- ・小規模学校（少人数学級）のメリットとデメリットについて、該当学校の学校長からの聴き取った内容の資料を学校教育課長が説明した。
- ・過密学級（35人以上の学級）のメリットとデメリットについて、該当学校の学校長からの聴き取り内容を資料をもとに学校教育課長が説明した。

(委員)

- ・学校が核となり地域や保護者とともに地域づくりをしていく学校運営には、ある程度の学校規模が必要なのではないかと思う。
- ・学年に2クラスあると、初任教諭との連携や教諭の出張・休暇の場合にも授業に安心感があるし、学年を育てる運営においても学級数（2クラス）は必要なのではないかと思う。

日程第2 いなべ市の学校教育の現状について

(会長)

- ・いなべの教育について教えていただきたい。

(事務局)

- ・いなべの教育とは、いなべの教職員一人一人が子供に向かって同じベクトルで同じ方向で子供たちを育てることができる学校教育である。どの学校でも子どものために子どもを中心に据えて教職員全員の方で目標を同じにして取り組みができること。このことにより個々の学校力が地域や保護者の信頼を得て、いなべの教育を高めている。

- ・教育研究所では、教職員の指導力を高めるために教師のニーズにあった研修を開設している。
- ・市教育研究会では、校長、教頭、教職員全てが構成員となり、各学校の研修担当教員が集まりいなべ市の子どもたちをどう高めていくのかということ論議し実践につなげる取り組みをしている。
- ・教育研究指定校事業では、学校の立候補により研究をすすめて、それぞれの学校で研究発表を行って教師同士が切磋琢磨し、また教師同士がスクラムの雰囲気を取り組み教育を高めようと努力している。
- ・もともとは「子どもの姿から出発する」という理念と、「子育て共同体という形で保護者が密接に結びついていく」という理念があり、そこに新しい取り組みがあるというのが「いなべの教育」である。

(委員)

- ・教育委員会で学力向上に力を入れているが、員弁東小学校は、過密度の高い学級で学力向上のための授業改善を行ったことが特色だと考えている。その特色の1つ目は標準学力検査NRTを利用して授業システムを作ること、2つ目は年2回の学級満足度調査Q-U活用の集団づくりをすることだ。他に、40年近く続いている地域と学校が一体となった伝統文化「豊年太鼓」に取り組んでいる。また、地産地消の取り組みや、『命』『花』『歌』人権まつり』の取り組みがある。各取り組みの中で、子育て共同体が希薄化しているのが今の課題だと感じている。今後は新校舎が完成するので、校舎を地域に開きながら学校を核にして学校公開の形でより地域と繋がっていきたいと思っている。
- ・丹生川小学校では、老人会による学校農園の支援や、地域見守りボランティアがPTA数90人に対して48人もの登録がされ、地域が非常に協力的である。校区内に外国籍の方が多く住む派遣会社のアパートがあり、外国籍の子どもたちが言語の壁や集団生活に馴染めないことにより発生するトラブルがあるという課題がある。子育て共同体として家庭訪問するが文化の違いがあり問題解決に困難を感じている。
- ・中里小学校も50年くらい前まで分校が2つあり、統合した経緯がある。当時通学距離の違いにより通学費としてのバス代の補助割合に違いが発生し、バス代の割合が原因である地区では通学する学校が分裂したところがある。地区の過疎化が原因と思われるが、毎年10人ほど児童数が減ってきている。40年近く参加しているFBCコンクールには、地域の期待もあり子どもたちも誇りとして取り組んでいるが、10数人の5年生で広い花壇を点々と分かれて作業しているというような状況になっている。子どもたちの様子としては問題行動なく、素直で、勉強もよくするが、声が小さかったり、人間関係において萎縮しているのではないだろうかという懸念もある。またPTAも減っているので会費収入が減ったため予算不足が起きている。
- ・いなべの教職員には校長をリーダーにしながらも共にすすめていこうという教職員の風土がある。行政とも子どものことで一致して大事なところを共に進めていこうという先輩時代からの風土がある。いなべの教育体制、教育のしくみの存在は大きい。合併前同じ員弁郡であったいなべ市と東員町とで以前から現在も教育研究会があり、今はいなべ市教育研究会も発足したが、その教育研究会の中で若い教師は皆で集まって研究を進める中で多くを学びあい、そういった場でいろいろな先輩方から大事にしていききたいことを教わってきたと感じている。皆で子どものことを中心にして教師として育ててきてもらったという感じだ。いなべの教育とは何かと一言では表せないが、そういう先輩方から大事にしてきたものを自分も大事にしながら引き継いでいくということを大切に考えている。現在は30~40歳代の教師が少なく引き継いでいくことが課題になっていると思っている。私の勤務している石榑小学校は市のコミュニティスクールの指定を受け、学校を拠点にした地域コミュニティスクールとして放課後児童クラブや学校見守りなど地域力を借りて運営している。総合学習では地域産業としての先行きの暗さが問題となっているものもあるが、各学年で様々な産業をテーマに取り組んでいる。
- ・藤原中学校は、平成8年まで1学年3クラスだったが現在は1学年2クラスである。少人数であることのデメリットは、他人の反応を気にしすぎること、自分の意見を出しにくいこと、コミュニケーション能力が弱いこと。メリットは、指示に従いやすいこと、少人数集団で1年生から3年生ま

で皆よく知った仲なので、上級生は先輩として後輩に良い姿をみせようとする意識が大きいことである。

- ・保育園では子育てについてわからない保護者の相談に応じることがよくある。子育てに悩む保護者は近年多いように思うので、小学校でも保護者の相談に応じやすい状況をつくっていただいている。「いじめ」の問題について、保育園の小さな子どもたちの間にもちいさいながらもいじわるをする場面があるが、小さなことから見逃さずにいけないことはいけないと言い続けていくことが大事なのだと思っている。
- ・ふじわら保育所は校区に1つの保育所ではないし地域も広いので、地域にお願いして活動しようとするとき、地域の選択に難しさを感じているという話をきいている。今の保育園は「保育」だけでなく「教育」も入ってきている。保育園職員も小学校の先生方と一緒に勉強させていただく機会があると、もっと充実した教育ができていくのではないかと思う。
- ・子どもが員弁東小学校に通っている。員弁東小学校は過密学級が多いが、授業の進め方等で先生方が努力されており、学力も向上している。学校の取り組み方によっては児童数に関係なく柔軟に対応していただけるのだろうと感じる。また、員弁中学校には、員弁東小学校と員弁西小学校から進学する。以前は中学校入学前にいろいろな噂を子どもや親も聞いて入学が不安になるようなこともあったが、今年は校長先生から「学校づくりや特色を持った取り組みはしているが、員弁西小学校と員弁東小学校は方向性を同じにして取り組んでいる」という説明があり、不安なく中学校に進める。このように小学校から中学校に行くことだけでも親は不安であるのに、学校が統合となれば保護者の不安は大きいと思う。統合となれば、不安は少なく期待の大きい統廃合にしていきたいと思う。
- ・教育研究所では、自由で自主的で創造的な教育ということを重んじて進めている。いなべの教育の理念は、「はじめに子どもありき」子どもの姿をしっかり見てそこから出発するということが大事な理念として踏襲されているところである。年配の教師から後輩に伝えきれているかということは反省すべき点もある。しっかり伝えていきたい。いなべの教育では、教師集団で地元のを掘り起こして地域でまなべる教材を自主教材として開発してきた。その教材をもって子どもたちに学ばせている。何よりも子どもを大事にする、子どもを育てることが一番の喜びである、そういうものを大事にする教師を育てていきたい。
- ・子どもの教育において、「知」「徳」「体」バランスよく育てていくことが大事だと思う。地域や保護者も協力的で、人間関係の密さがあるし、人権教育や特別支援教育も進めていることから「徳」についての教育は評価できるところにある。「知」の部分はどうするかであるが、市になってから客観的に見るツールとして学力調査を取り入れてきている。調査結果が良くないと担当の教師は指導が悪かったという評価を受ける厳しい面もあるが、それを乗り越えていけるのは、これまでいなべの教育の中で培ってきた先生方の団結力があるからこそであると思う。教師のうつ病が非常に多いわけだが、全国的にみてもいなべ市は少ないと思う。教師同士が支えあっている土壌があることが大きい。子どもたちにとって、学校が安心できる場所でない、勉強に取り組めないから学力はつかない。そのためにまずは子どもたちの人間関係をきちんと把握できないといけない。いなべ市内全校で年2回行うQ-U調査はそれぞれの学級における満足度が把握できる調査である。特に小学校高学年以上になると表面上はにこやかであっても悩んでいる場合がある。そういった場合にある程度状態をつかめて、教師は調査結果を参考に学級づくりを見直していける。これまでは教育理念は同じでもその方法論が違っていたが市になって統一されてきた。過密学級においても県や市が予算を投入し教員を加配している。市でも教員の研修講座等にも多くの予算を投入している。効果が出るはずだし、その効果を大きくするのは学校の管理職の力量である。「体」について、「体が資本」とよくいうが、家庭でも勉強の方に力をいれがちで、それはやむを得ないことだが、体が弱いと何も出来ない。「徳」「知」についてはさらに努力していただき、さらに「体」についてもしっかりと体づくりに取り組んでいただきたい。「スポーツ」ではなく「体育」という面で指定校を作って発信していただきたい。

(会長)

- これからいなべの教育を実現するための手段として小学校適正規模を検討していかなければならない。このため、子どもを中心として教師が一致結束してやっていくしくみ、またそれが地域づくりに結びついていくというしくみを整理し、それを実現するためにはどういったツールが必要なのか、統廃合が望ましいのかどうなのか、ということを考えていきたいので事務局で整理しておいてください。
- 校区単位の子どもの人口推移の動向も整理して、校区の組み合わせを事務局で検討してたたき台を作っておいてください。
- 学校規模の適正化に向けた財政的なタイムスケジュールを委員間で共通認識を持てるような資料を事務局で用意してください。
- 小学校の体育館を含めた施設ごとの状況を整理してください。

次回開催予定

- 平成24年10月4日（木）午後2時から